

チャランケ通信 第 115 号 2015 年 8 月 17 日

「チャランケ」とは、アイヌ語で談判、論議の意、「アイヌ社会における秩序維持の方法で、集落相互間又は集落内の個人間に、古来の社会秩序に反する行為があった場合、その行為の発見者が違反者に対して行うもの、違反が確定すれば償いなどを行って失われた秩序・状態の回復を図った」(三省堂『大辞林』より)

元参議院議員 峰崎直樹



安倍談話を聞いてみて、『心から出た言葉でなければ、人の心を捉えることは出来ない』と実感

今年は、戦後 70 周年と言う節目の年に当たっている。それと同時に、安倍総理はかねてより「村山談話」に対して、あまりにも自虐的な歴史認識であるとして、公然と月刊誌で批判されてきた。また安倍総理の歴史観について、中韓両国やアメリカまでも警戒する声が強まっていた。そして、今審議中の安全保障法案についての国民の厳しい批判的な見方も強まっている。それだけに、今年の 8 月にはどんな談話を発表するのか、注目してきた。8 月 14 日、閣議決定を終えて記者会見に臨んだ安倍総理には高揚感はなく、率直に言って過去の談話に比べて冗長な物になってしまったとの印象は免れない。

一言で言えば、『心から出た言葉でなければ、人の心を捉えることは出来ない』と言えよう。何度「安倍談話」を読み直しても、心に強く迫るものを感じないのだ。ただ、あらゆる方面への気配りがちりばめられており、本人の本心

とは異なると思われる「村山談話」の踏襲を内外に宣言せざるを得なかったのだ。何のために「安倍談話」を作ったのか、まことにその性格がよく解からない「談話」になってしまったようだ。

戦後50年の「村山談話」には、高い評価がなされてきた

8月という月は、全ての日本人にとって鎮魂の月であり、歴史を振り返るべき時でもある。とりわけ8月15日は、ポツダム宣言の受諾を国民に向けて天皇自らが放送した日として、「終戦」記念日とされて今日に至っている。決して「敗戦」とは言わないところに、問題はあるのかもしれない。もし「敗戦記念日」を設定するのであれば、9月2日戦艦ミズーリ号において、全権大使重光外務大臣が正式に敗戦の署名をした日がふさわしいのだろう。でも、日本人にとっては、やはり昭和天皇の玉音放送の発せられた8月15日こそ、「終戦記念日」として相応しいのだろう。

さてその「終戦」記念日であるが、今年は丁度70周年と言う区切りのよい年になっており、過去50周年は「村山談話」、60周年は「小泉談話」として、国の内外に向け時の総理大臣が日本国としての先の戦争に対する歴史認識を明確にしてきた。とりわけ「村山談話」については、自社さ政権と言う連立政権の下で、少数与党社会党の村山総理ではあったものの、50年と言う節目の年に記念すべき談話を公表したことは、国際的にも高く評価されてきた。

自民党内には絶えず歴史修正主義が台頭し、近隣諸国から批判が

というのも、長い間政権政党であった自由民主党の中には、日本が第二次世界大戦で敗北し、サンフランシスコ平和条約の調印で以て占領から脱却して行く過程の中で、日本の戦争責任を裁いた連合軍の東京裁判にたいして、その裁判結果を認めない発言や、その裁判で絞首刑に処せられたA級戦犯が祀られてしまった靖国神社へ公式参拝する政治家が後を絶たなくなっていたのだ。それだけに「村山談話」は、改めて日本国の総理大臣としての過去の日本の進めてきた戦争に対する歴史的な総括を、国の内外に明確にしたという点で大きな影響を与えたことは事実であり、その後の歴代総理大臣は「村山談話」を基本的に踏襲し、今日に至ってきたのである。60周年の「小泉談話」も、「村山談話」を基本的に踏襲したものとなっている。

安倍談話も、結局「侵略」や「おわび」羅列し、村山談話も踏襲

「村山談話」の中で重要なポイントは、先ず第一に「侵略」と言う点に関して、「わが国は過去の一時期、国策を誤り」「植民地支配と侵略」によってアジアに損害を与えたと明確にしていたのに対して、

「安倍談話」は「侵略」については「事変、侵略、戦争」と羅列したものの、日本の行為かどうかの特定は避けており、明らかに「村山談話」から後退している。

もう一つの焦点であった「おわび」については、村山談話では「痛切な反省とおわび」を明確にしているのに、「安倍談話」では、過去の日本が行ってきた事実として言及し、「歴代内閣の立場」を継承すると約束しているだけで、明らかに後退している。

かくして、「安倍談話」を聞いていて、どこか他人事のように思われる記述が多く、自らの本心ではない事をいやいやながら発言を迫られ、妥協の末の文言の羅列に終わっているように思われてならないのだ。

この談話で、子や孫に謝罪を続けさせることに終止符が打てるか

さらに、「謝罪＝おわび」について、「安倍談話」では「私たちの子や孫に、謝罪を続ける宿命を背負わせてはなりません」と述べ、この談話で以て「謝罪」は終わらせたい、と言う思いを強く出している点がやや目立つ。ただ、日本側から閣僚らが歴代内閣の立場を疑わせるような発言が繰り返されたり、靖国神社への首相自らが参拝するなど、信頼を損ねてきたことを今後除去できるのか、中国や韓国はもちろんアメリカなども含めて世界的に注視されていることを忘れてはなるまい。まさに、「歴史とは実に取り返しのつかない、苛烈なもの」であることを示していると言えよう。

中国や韓国への配慮も滲んではいるのだが、言葉だけでは・・・

こう見てくると、「安倍談話」は何のために出したのだろうか。安倍総理の本音では「村山談話」の歴史認識に「自虐史観」が強すぎるとしてかねてより反対してきたわけで、それを貫こうとしたものの内外の大きな抵抗の下で結局は歴代内閣の採ってきた立場を引き継ぐことを明言せざるを得なかったといえよう。その背後には、今後の日本と中国・韓国との関係を改善しなければならない事への配慮もあったであろう。中国大陸においては約 3000 人にも及ぶ中国残留孤児の問題や、韓国政府などとの間では従軍慰安婦問題も言葉としては出ていないのだが、二か所にわたって、「深く名誉と尊厳を傷つけられた女性たち」への言及が為され、「二十一世紀こそ、女性の人権が傷つけられることのない世紀とするため、一層、力を尽くしてまいります」と明記している。この点における今後の政府の努力を強く求めたいが、特に今後の日中韓の外交関係の発展に向けて、真剣に努力して欲しいことを付け加えておきたい。

国民は、意外と安倍談話を支持する声が 44% と高いのは何故？

さて、今回の「安倍談話」について、国民はどのように判断しているのだろうか。共同通信は14～15日にかけて電話による調査を実施し、その結果を公表している。それによると、今回の「阿部談話」を「支持する」と答えた比率は44%で、「支持しない」は37%となり、支持する比率が過半数には達しなかったものの支持しないを上回り、内閣支持率でも43%へと上昇し前回の7月の37.7%から5.5%上回っている。これを見る限り、今回の「安倍談話」は、国民の中では比較的好意的に受け止められていると言えよう。

今後の中国・韓国との首脳会談で、本当の信頼関係ができるのか

この結果について、政権与党側は国民からの支持が得られたとして安堵感が漂っているようだが、どれだけの国民がこの「安倍談話」を十分読みこなして理解されているのか、今後の国会での論戦はもとより、日本外交のなかで中国や韓国だけではなく、国連やアメリカを含めたかつての戦勝国との外交の中でその真価が試されていくに違いない。当面は、日中、日韓の首脳会談がどのように展開されていくのか、中韓両国の今回の安倍談話に対する受け止め方には複雑なものがあるだけに、その行方を注視していく必要がある。

岩波書店の朝日新聞全面広告、柄谷行人さんのインタビュー

「戦後70年 憲法9条を本当に実行する」に注目

この談話が出された翌日、朝日新聞に岩波書店の一面を使った全面広告に眼が行った。柄谷行人氏が「戦後70年、憲法9条を本当に実行する」と題してインタビュー記事が掲載されていた。その中で、次の指摘に思わず目が行ってしまった。

「現在の政権が本気で戦争をする気があるなら、たんに憲法の解釈を変えるのではなく、九条そのものを変えるべきですね。むろん、それはできない変えようとする政権や政党のほうが壊滅します。戦争を拒否する無意識の『超自我』が存在するからです。憲法九条はいわば『虎の尾』です。今の政権は、これを踏んでしまったのではないですか。」

これからのわれわれの進むべき運動の方向について、一つの視座を提供してくれていないだろうか。